埼玉大学紀要　教育学部、五八（一）：一-一一（二〇〇九）

天台山の詩歌（其一）～六朝以前（上）

*薄　井　俊　二

キーワード：天台山、天台集、漢詩、仏教文学、道教文学

*埼玉大学教育学部国語教育講座

はじめに

中国浙江省の天台山は、古くから神聖な山とされてきたが、隋代に天台智顗が、そして唐代に司馬承禎が入山して以降は、皇室などの尊崇も受け、仏道双方にわたる霊山とされてきた。日本の最澄や円珍も訪れており、中国のみならず東アジアの山岳宗教を考える上で重要な山のひとつとなっている。[1]

一方、美しい自然にも恵まれているこの山は、文人たちにも注目され、東晋の孫綽の「遊天台山賦」をはじめ、孟浩然・李白・白居易・欧陽脩・蘇軾といった名士から無名の詩人の作品に至るまで、数多くの詩が残されている。そこでそうしたたくさんの詩作品を、時代を通して検討することで、当時の人々の抱いていた、天台山に対するイメージとその変遷を明らかにすることができるのではないかと考える。

本稿は、こうした観点から、天台山に関わる詩作品を取り上げて検討を加えてみようとするものである。

今回は、先ず、詩作品検討の前提となる事項を「序説」として確認し、その後、六朝時代以前の作品から三点選び、訳注を施す。

序説　天台山詩を収録する文献

本節では、天台山に関する詩を収録している典籍について該述する。

天台山に関わる詩をもっぱら収録している選集に、宋李庚・林師蔵等・林表民編集の「天台前集」がある。他に、近人の集注である許尚枢の「天台山詩聯選注」がある。鄙見によれば、選集はこの二点である。その他、明の釈伝灯撰述の「天台山方外志」、「古今図書集成」でも詩を集めた部分がある。[2]以下簡単にそれぞれの概要を述べる。

（一）「天台前集」について（附、「赤城集」）

李庚らの「天台前集」は四庫全書に収録されて残っている。そこで先ず「四庫全書総目提要」の該当箇所を掲げ、次にこの資料についての検討を施しておく。

●「四庫全書総目提要」巻一八七　集部四〇　総集類二（本文は珍本第二集所収）

■本文

【天台前集三巻前集別編一巻續集三巻續集別編六巻】（浙江范懋柱家天一閣藏本）

案：是集皆裒輯天台題咏。《前集》、宋李庚原本、林師蔵等増修、皆録唐以前詩、成於寧宗嘉定元年戊辰、有郡守宣城李兼序。《前集別編》一巻、則師蔵子表民所輯補。又附拾遺詩十二首、有陳耆卿跋及表民自記、題癸未小至、乃嘉定十六年。《續集》前二巻亦李庚原本、後一巻則師蔵、林登、李次瞽等所彙録、皆宋初迄宣・政間人之詩、亦成於嘉定元年。後附拾遺詩七首、跋稱得此於會稽鬻書者十年、今刻之《續集》後、似亦爲表民所題也。《續集別編》則表民以所得南渡後諸人之詩及《續集》内闕載者、次第裒次而成。前五巻末有表民自跋、題戊申中秋、乃理宗淳祐八年、後一巻末題庚戌夏五、則淳祐十年。蓋父子相繼甄輯、歴四十年而後成書也。庚字子長、其爵里無考。

惟李兼序有「李棨出其先公御史所裒文集」語、又有「寓公李公語」、則嘗官御史而流寓天台者也。

師蔵字詠道、臨海人、嘗官州學學諭。表民字逢吉、與林登、李次碁仕履均不可考。表民別有《赤城集》、詩文兼載、此集則有詩而無文。雖僅方偶之賦詠、而遺集淪亡者、毎藉此以幸存百一、足爲考古者採摭之所資、固當與《會稽掇英總集》諸書並傳不廢矣。此爲明初刊本、而《前集》後題「台州州學教授姚宜中校勘」一行。《前集別編》後題「台州州學教授姜一容點檢」一行。蓋原從宋刻翻雕、故尚仍舊式。惟毎集下以元亨利貞四字分編。案：「貞」乃宋仁宗嫌名、宋代諸書例皆改避、師蔵等不應於標目之中顯觸廟諱、殆重刻者所妄加歟？

■訓訳

案ずるに是の集は皆　天台の題咏を裒輯するなり。

《前集》は、宋李庚の原本、林師蔵等の増修、皆　唐以前の詩を録す。寧宗の嘉定元年戊辰に成る。郡守宣城の李兼の序有り。

《前集別編》一巻は、則ち師蔵の子　表民の輯補する所なり。又拾遺詩十二首を附す。陳耆卿の跋、及び表民の自記有り。「癸未小至」と題すれば、乃ち嘉定十六年なり。

《續集》前二巻も亦た李庚の原本、後一巻は則ち師蔵、林登、李次碁等の彙録する所なり、皆　宋初より宣・政間迄の人の詩なり。亦た嘉定元年に成る。後に拾遺詩七首を附す。跋に「此を會稽の鬻書に得て十年、今《續集》の後に刻す」と稱すれば、亦た表民の題する所たるがごとし。

《續集別編》は、則ち表民得る所の、南渡後の諸人の詩、及び《續集》内に闕載せる者を以て、次第に裒次して成る。前五巻末に表民の自跋有り。「戊申中秋」と題すれば、乃ち理宗の淳祐八年なり。後一巻の末に「庚戌夏五」と題すれば、則ち淳祐十年なり。

蓋し父子相繼いで甄輯し、四十年を歴して後に成書するなり。

庚、字は子長、其の爵里に考無し。惟だ李兼の序に「李棨、其の先公の御史の裒する所の文集を出す」の語有り。又た「寓公李公」の語有れば、則ち嘗て御史に官して天台に流寓する者なり。

師蔵、字は詠道、臨海の人。嘗て州學學諭に官たり。

表民、字は逢吉、林登・李次碁と仕履するも均しく考すべからず。表民に別に《赤城集》有り。詩文兼載す。此の集は則ち詩有りて文無し。

（この集）僅に方偶の賦詠なりと雖も、淪亡を遺集する者にして、毎藉此以て、幸いに百に一を存す。古を考うる者の採摭の資する所と爲るに足る。固より《會稽掇英總集》諸書の並びに傳して廃せざるに當る。

此れ明初の刊本たりて、《前集》の後に「台州州學教授姚宜中校勘」の一行を題す。《前集別編》の後に「台州州學教授姜一容點檢」の一行を題す。蓋し原は宋刻に從いて翻雕するなり。故に尚ほ舊式に仍る。惟だ毎集の下に「元亨利貞」四字を以て編を分す。案ずるに「貞」は乃ち宋仁宗の嫌名なり。宋代の諸書の例　皆　改避す。師蔵等　應に標目の中において顯かに廟諱に觸れるべからず。殆んど重刻せる者の妄りに加ふる所ならんか。

■語注

○裒輯…よせあつめること。○李庚…不詳。○林師蔵…不詳。○李兼…不詳。○林表民…不詳。○陳耆卿…撰著に『嘉定赤城志』があ

る。○小至…冬至の一日前。○林登…不詳。○李次彗…不詳。○宣・政間…政和・宣和ならば、徽宗末の年号。北宋末ということか。○裒次…集めて編次する。○甄輯…調査して集める。○寓公李公…この句、現行本の李兼の序になし。○方偶…方偶ならば一方の隅。○淪亡…沈み滅びる。○採摭…拾い取る。○會稽掇英總集…二十巻。宋孔延之の編。越州の長官であったときに会稽に関する詩文・金石など八百五篇をあつめたもの。存。四庫全書所収。

●**解説**

「四庫提要」の記事なども参照しながら「天台前集」について概観しておく。

本書はもとは「天台集」という名で、李庚なる人物が天台山に関わる唐代以前の人の作品を集めていたものであった。これに林師蔵らが補修を加えて三巻本とし、南宋の嘉定元年（一二〇八）に世に出した。これと同時に、林師蔵の子の林表民が北宋期の詩を集め、「天台続集」として「天台集」の附録とした。更に、嘉定十六年（一二二三）に至り、林表民が唐代の詩を拾遺し「前集別編」とした。更に淳祐八年（一二四八）と同十年（一二五〇）に、やはり林表民が宋朝南渡後の作品と「天台続集」未収録の作品とを集めたのが「続集別編」である。林表民には、他に天台山に関する詩文集である「赤城集」の編集もあった（これについては後述）。

本稿では、主に唐代以前の作品を扱う予定であることから、「天台前集」「前集別編」収録の詩についてあらましを述べておく。

上巻には、孫綽の賦など六朝期の賦が二篇、李徳裕の賦が一篇。謝霊運と李巨仁など六朝の詩が三篇。唐玄宗以下中唐までの詩が五十一篇。中巻には、中・晩唐の詩が八十一篇。下巻には、晩唐や僧侶の詩が五十九篇。別編には、秦時歌謡など隋以前の詩が七篇、唐代の詩が九十三篇。拾遺には葛玄の詩が一篇、唐代の詩が十一篇収録されている。合計すると、賦が三篇で詩が三百六篇、時代で言えば、隋以前のものが十三篇で唐代のものが二百九十六篇となる。

唐代のものでは全唐詩に未収のものもあり（柳泌「贈衡岳隠禅師」、李紳「題龍宮寺淨院四上人」、鄭薫「桐柏観」等）、また文字の異同の検討の上でも貴重である。

本稿では「前集」と略す。

○**補説**～林表民の「赤城集」

「天台続集」等に関わった林表民に「赤城集」という詩文集がある。しかし四庫全書所収の現行本は文のみを収録し、詩はすべて脱落している。ここでは参考に四庫提要のみを掲げておく。

●「四庫全書総目提要」巻一八七　集部四〇　総集類二（本文は珍本第十集所収）

■**本文**

【赤城集十八巻】（浙江鮑士恭家藏本）

宋林表民編。集中載呉子良《赤城續志序》、稱其字曰逢吉、與撰《天台前集別編》之林表民合。又稱爲東魯人、則里貫互異。蓋其先世自曲阜徙臨海、故從其祖貫言之、非別一人也。表民嘗續陳耆卿《赤城志》、復取記志書傳銘誄贊頌之文爲志所不載者薈而輯之、以成此集。前有淳祐八年呉子良序、稱分門薈稡、并詩爲一。今此集僅有文一百

八十二首、而無詩。又明謝鐸《赤城新志》載《赤城集》二十八巻、有刻本在内閣、而此本亦祇十八巻、疑原本尚有詩十巻、爲傳鈔者所脱佚、已非完本矣。

■訓訳

【赤城集十八巻】（浙江鮑士恭家藏本）

宋林表民編。集中に呉子良《赤城續志序》を載す。其の字を稱して逢吉と曰う。《天台前集別編》を撰する林表民と合す。又た稱して東魯人と爲す。則ち里貫　互いに異なる。蓋し其の先世　曲阜より臨海に徙る。故に其の祖の貫に從いて之を言う。別の一人に非ざるなり。表民　嘗て陳耆卿の《赤城志》を續ぐ。復た記志書傳銘誄贊頌の文の、志に載せざる所の者を取り、薈（わい）して之を輯め、以て此の集を成す。前に淳祐八年の呉子良の序有り。門を分かちて薈稡すと稱す。詩を并せて一と爲す。今　此の集　僅に文一百八十二首有るにして、詩無し。又た明謝鐸《赤城新志》に《赤城集》二十八巻を載す。刻本の内閣に在る有り。而るに此の本も亦た祇だ十八巻のみ。疑うらくは原本に尚お詩十巻有りて、傳鈔者の脱佚する所と爲りしならん。已に完本に非ざるなり。

■語注

○林表民…前掲。　○陳耆卿《赤城志》…いわゆる「嘉定赤城志」。後掲。○薈…しげる、おおうの意だが、薈集ではあつめるの意。　○淳祐八年…前掲の「天台続集別編」成書と同じ年である。　○薈稡…あつめる。郭璞「爾雅序」に「薈稡舊説」とある。

（二）伝灯「天台山方外志」

本書は天台山の地誌で、撰者の釈伝灯は、天台山の高明寺の僧侶。万暦二十九年（一六〇一）の成書。「中国仏寺志彙刊」第三輯所収。全三十巻で、巻二十七～巻三十の「文章考」に、明代までの天台山関係の詩が収録されている。

本稿では「方外志」と略す。

（三）「古今図書集成」

方輿彙編山川典の、第一百二十一巻～巻一百二十五が天台山、巻一百二十六が桐栢山を対象とする。このうち、巻一百二十五天台山部芸文三が詩で、明代までの詩を収録している。また巻一百二十六にも桐栢山関係の詩を若干収録する。

本稿では「古今」と略す。

（四）許尚枢「天台山詩聯選注」

西安地図出版社の「天台山旅遊文化叢書（全五冊）」のひとつ。許尚枢の編著。赤城・桐栢などの地域に分けながら、古代から現代に至る詩を収録し、簡単な註を施したもの。日本人の作品や、聯なども収録している。

本稿では「許本」と略す。

一　天台山の詩（其一）～六朝以前（上）～

本節では、六朝以前の作品から三点を取り上げる。

●凡例

・丸数字で、「天台前集」でのタイトルを掲げる。

・☆で「前集」や「許本」での収録状況を、★でその他の資料における収録状況を述べる。

・以下、**■本文と訓訳**、**■校勘**、**■語注**、**■口語訳**、**■解説**、の順で記述する。

・本節での略称は次の通り。

全漢詩…民国丁福保「全漢三国晋南北朝詩」五十四巻

先秦詩…近人逯欽立「先秦漢魏晋南北朝詩」一九八三年刊

詩紀…明馮惟訥「古詩紀」百五十六巻

①茅初成昇天謡　秦時邑謡

☆前集別篇巻一、許本巻七

★全漢詩・先秦詩ともに収録せず。

■本文と訓訳

神仙得者茅初成　　神仙得る者は茅初成

駕龍上昇入太清　　龍に駕して上昇し太清に入り

時下玄洲戲赤城　　時に玄洲に下りて赤城に戯る

繼世而往在我盈　　世を繼ぎて而往　我が盈に在りて

帝若學之臘嘉平　　帝若し之に學べば臘を嘉平とせよ

■語注

○茅初成…茅濛のこと。初成は字。三茅真君の曾祖父（または高祖父）で、鬼谷先生に師事して長生の術を学んだ。華山に入って修行を続け、始皇三十一年に至って「乗雲駕龍、白日昇天」したと伝えられる。　○太清…太清境のことか。道教の最高仙境である三清境のひとつ。ここでは俗なる地上界に対する聖なる天上界を代表しているのであろう。　○玄洲…神話中の十洲のひとつ。「海内十洲記」（「漢魏叢書」所収）に「玄洲、在北海之中、戌亥之地、方七千二百里、去南岸三十六萬里、上有太玄都、僊伯眞公所治」とある。ここでは地上にある、神仙の居所を代表させているのであろう。　○赤城…天台山の赤城山を指すのかは不明であるが、もしそうであれば、赤城山に言及した資料としてかなり古いものとなる。　○繼世而往…先世を継承して以後。　○盈…茅盈のこと。字は叔申。先ず恒山で修行に入り、のちに句曲山で得道、昇仙した。ふたりの弟がおり、兄の昇仙にならって修行を行い、仙を得た。この三人を総称して、三茅真君という。ある伝承では、漢の元寿二年（前二年）に、天台山の赤城山で「司命真君」となったという。その後、句曲山を茅山と呼ぶようになった。いわゆる茅山派道教の始祖ともいえる。　○臘…冬至の後に行う先祖・百神を祭る祭祀。臘の祭りを嘉平と称したのは、夏礼であるとか、殷礼であるなど諸説がある。

■口語訳

神仙となり得たのは茅初成。

（彼は）龍が引牽く車に乗って、はるか天上界へ昇った。

時には地上の玄洲へ下っては、赤城山で遊んだりもした。

その後、世が代わって以降、当代では茅盈がある。

皇帝が彼に学ぶならば、臘を嘉平と改めるであろう。

■解説

脚韻は、成・清・城・盈・平のいずれも、平水韻で「庚平」。

許本は「邑謡」と題し、撰者を「秦逸名」とする。この謡は全漢詩・先秦詩いずれも収録していないが、「史記・始皇本紀」の集解に引く「太原真人茅盈内紀」なる資料に収録されている。

「史記・秦始皇本紀」本文には「三十一年、十二月、更名臘曰嘉平」とあり、「集解」は「太原真人茅盈内紀」なる次の資料を引く。

太原真人茅盈内紀曰、始皇三十一年九月庚子、盈曾祖父濛、乃於華山之中、乘雲駕龍、白日昇天。先是、其邑謡歌曰、『(本謡)』。始皇聞謡歌而問其故、父老具對此仙人之謡歌、勸帝求長生之術。於是始皇欣然、乃有尋仙之志、因改臘曰嘉平。

これによれば、茅濛の華山における昇僊に先だって、この謡が流行し、それをきっかけとして始皇帝は神仙思想に引かれるようになり、臘の祭りを嘉平と改称したという。

「太原真人茅盈内紀」は不詳だが、「太玄眞人東郷司命茅君内伝」という書名が「隋書経籍志」(雑伝)や「通志」に見え、李遵の撰とする。李遵については不詳だが、「通志」などが唐人とするのに対し、陳国符「道蔵源流考」は晋代の人とし、「内伝」も晋代には世に出ていたとする(「茅君伝」)。また「雲笈七籤」巻一〇四には「太元眞人東嶽上卿司命眞君伝」を掲載して、史記集解の右記の説話を、謡歌も含めて収録している。

本歌は、設定上は秦漢ごろの謡であるとなっているが、全漢詩・先秦詩ともに当該時代のものとして収録していない。「神仙」の語も六朝時代以降のものであろう。陳國符の説によれば、晋代の仮託ということになるが、史記集解が初出と考えると、唐代まで下るかもしれない。七言で、脚韻が揃っているというのも、後世の仮託を伺わせる。

②和紫微右英夫人　王子晉［眞誥］

☆天台前集別篇巻一

★眞誥運象篇第三(「正統道蔵」太玄部所収)、全漢詩は未収。先秦詩は晋詩巻二十一に楊羲の「雲林與衆真吟詩十首」のひとつとして収録。詩紀外集巻二。

■本文と校勘

寫我金庭館　我が金庭の館を寫して
鮮(一)駕三秀畿　駕を三秀の畿に鮮(と)く
夜芝披華峰(二)　夜芝は華峰に披(ひら)き
咀嚼充長饑　咀嚼して長き饑えを充たす
高唱無逍遙　高唱して逍遙する無く
各(三)興有待歌　各おの有待の歌を興す
空洞詶(四)靈音　空洞にて靈音に詶す
無待將如何　無待　將(は)た如何せん

■校勘

〈一〉眞誥作解。〈二〉眞誥作鋒。校注「謂應作峯字」。〈三〉眞誥校注作冬。〈四〉眞誥作酬。

■語注

○金庭館…神霊の館として一般名詞としても使われるが、「眞誥」巻十一に「越桐栢之金庭、呉句曲之金陵、養眞之福境、成神之靈墟」とあり、王子晋に関わる桐栢山にある建物だとされる。○寫…訳注は「去る」と訳す。辞書的な意味ではこれは見あたらない。通常は「卸す」から「書き写す」の意味。○三秀…霊芝の名。一年に三度花が咲くので言う。訳注は、三秀嶺を茅山と注する。○畿…地方、田野、境。○觧…解に同じ。○夜芝…夜光芝のことか。そうであれば、神芝のひとつ。「太平御覧」巻九八六に引く「茅君内伝」に、「句曲山有神芝五種。……第四曰名、夜光芝。其色青、實正白如李。夜視其實如月、光照洞一室」とあり、同引く「神仙伝」に、「夜光芝生於名山之陰、大谷涼泉金石間。有浮雲翔其上」とある。○華峰…華頂峰のことか。○有待、無待…有待と無待をめぐる言説は、この歌も含めた、眞誥のこの箇所に頻出。「荘子・逍遙遊」において列子が風を御してきままにただよい、歩くことから解放されてはいても、なお「風」という「所待者」が有る存在であり、無窮に遊ぶ「待つものがない」存在には及ばないとする論や、「荘子・斉物論」の罔両と景との対話において、景が自らを「吾有待而然者邪」としたのに基づく概念であろう。有待とは、何かに依拠、依存して存在していることで、逍遙の境地に至ることはできない。無待とは、何者にも依拠、依存することなく絶対自由を得ていること。この眞誥の一連の歌は、無待を有待よりも望ましい境地とは考えて居らず、有無の対立を超えたところに新たな境地を見いだそうとしているようである。○靈音…霊妙なる音楽、あるいは音声。「雲笈七籤」巻十四に引く「靈宝洞玄自然九天生神章経」に「玉條流逸響、從容虚妙話。靈音振空洞、九玄離幽裔」とある。訳注は神々の言葉とする。○詶…のろう。あるいは、むくいるの意味で「酬」に通じるという。

■口語訳

わが金庭の館を去って、馬車を三秀の地にとどめる。
夜光芝は華峰に披き、それをかみしめて長い間の飢えを充たす。
高らかに歌って、あちこちさまようことはなく、それぞれ有待の歌を唱う。
ぽっかり開いた空間で神々の言葉に応酬する、無待の方々さあどうですか。

■解説

脚韻は、平水韻では、畿・饑が「微平」、歌・何が「歌平」。
本歌は、眞誥に収載されている。眞誥の本文と訳注については、吉川忠夫他編『眞誥校注』（「校注」と略）、「『眞誥』譯注稿（一）」（「東方学報（京都）」第六十八冊、一九九六、「訳注」と略）による。口語訳は、訳注のものを転載した。
眞誥では、先ず王子晋の記事が二条あり、そのあとに、英王夫人の歌、紫微夫人がそれに答えた歌、続けて本歌が、桐栢山真人の歌として置かれ、さらに清虚真人らの歌が続いている。歌群としては、注にも言及したが、有待と無待の立場を交互に主張しながら最後には有無の対立を超越した立場を明らかにしようとしているように見える。
天台集がこの歌を収録したのは、桐栢真人の歌と明記されているからであろうが、天台山との関わりはあまり感じられない。

③遊仙詩　曹植

☆天台前集別篇巻二

★芸文類従巻七十八、詩紀巻一四、先秦詩上、曹植詩校注（「校注」と略）

■本文と訓訳

人生不滿百　人生は百に滿たず
戚戚少歡娛　戚戚として歡娛少なし
意欲奮六翮　意　六翮を奮ひ
排霧陵紫虛　霧を排して紫虛を陵がんと欲す
蟬蛻同松喬　蟬蛻すること松喬に同じく
翻跡登鼎湖　跡を翻して鼎湖に登る
翺翔九天上　九天の上を翺翔し
騁轡遠行遊　轡を騁せて遠く行遊す
東觀扶桑曜　東は扶桑の曜けるを觀
西臨弱水流　西は弱水の流るるに臨む
北極登玄渚　北は極めて玄渚に登り
南翔陟丹丘　南は翔せて丹丘に陟る

■校勘

〈一〉本集作歳歳。廣文選同。詩紀云、一作歳歳。〈二〉本集誤作舊。〈三〉先秦詩云、詩紀作玄天。注云、一作登玄。

■語注

○人生不滿百…人生が百年に滿たないことは、「古詩十九詩・第十五」（「文選」巻二十九）に「生年不滿百、常懷千歳憂。晝短苦夜長、何不秉燭遊。爲樂當及時、何能待來茲。愚者愛惜費、但爲後世嗤。仙人王子喬、難可與等期」とある。○戚戚…愁いの形容。「論語・述而」に「君子坦蕩蕩、小人長戚戚（君子は坦らかに蕩蕩たり、小人は長く戚戚たり）」とあり、「古詩十九詩・第三」に「極宴娛心意、戚戚何所迫（宴を極め心意を娛しましむれば、戚戚何ぞ迫る所あらん）」とある。また曹植「九愁賦」にも「愁戚戚其無爲、遊緑林而逍遙」とある。歳歳ならば、毎年。○六翮…鳥の羽や翼。「戦国策・楚策」に、荘辛が楚襄王に語った言葉として、黄鵠のことを述べて「以奮其六翮、而凌清風、飄搖乎高翔」とある。○紫虛…天空のこと。校注は、曹植「九愁賦」に「絶紫霄而高騖、飄弭節於天庭（紫霄を絶して高く騖せ、飄として節を天庭に弭む）」とある紫霄と同じ意味だろうという。○蟬蛻…すっぽりと抜け出すこと。「史記・屈原伝」に、屈原を評して「濯淖汚泥之中、蟬蛻於濁穢（汚泥の中で濯淖い、濁穢より蟬蛻す）」とある。○松喬…赤松子と王子晋（子喬）。いずれも古代の仙人。○鼎湖…黄帝が鼎を鋳造したという場所。「史記・封禪書」に、宝鼎の出土をめぐる挿話として、武帝に述べた公孫卿の言葉を載せ、「黄帝采首山銅、鑄鼎於荊山下。鼎既成、有龍垂胡髯、下迎黄帝。……故後世因名其處曰鼎湖」とある。○翺翔…飛ぶこと。「荘子・逍遙遊」に「翺翔蓬蒿之間、此亦飛之至也（蓬蒿の間に翺翔す、此も亦飛ぶの至りなり）」とある。○行遊…出かけること。曹植「雜詩」（「文選」巻三十）に「僕夫早嚴駕、吾將遠行遊（僕夫早く駕を嚴めよ、吾将に遠く行きて遊ばんとす）」。○扶桑…東海の彼方にあるという神木。「山海経」などに頻出。○弱川…神話上の川。崑崙山の麓を流れているなどといわれる。「山海経」などに頻出。○玄渚…深い池。神話的なものか。ここでは「登る」対象となっていることから、仙界にあるとの認識が認

められる。張衡「西京賦」（「文選」巻二）に「海若游於玄渚、鯨魚失流而蹉跌（海若は玄渚に游び、鯨魚は流れを失いて蹉跌す）」とある。○丹丘…仙人の住むところで昼夜常に明るいという。「楚辞・遠遊」に「仍羽人於丹丘兮、留不死之舊郷（羽人に丹丘に仍り、不死の舊郷に留まる）」とある。

■口語訳

人生は百年に満ちるものではなく、戚戚と愁いのみ多く歡娯することは少ない。

（そこで）翼を奮って飛び上がり、霧雲を推し拡げて天空遥かに登ろうと思う。

赤松子や王子晋のように、すっぽりとこの世の汚濁から抜けだし、地上の痕跡を吹き飛ばして黄帝が昇仙したという鼎湖に登る。

天の上を高く飛翔し、馬車を遠くまで走らせて行く。

東は神木の扶桑が輝くのを眺め、西は弱水が崑崙山の麓を流れているのに臨む。

北は極まりまでいって玄渚に登り、南は翔せていって丹丘に陟るのである。

■解説

天台集は、「翺翔九天上」以下の六句のみ収録しているが、本来は十二句からなるものなので、全句をあげた。

脚韻は、平水韻では、娯・湖が「虞平」、虚が「魚平」、遊・流・丘が「尤平」。

本詩は、いわゆる遊仙詩のひとつ。天台集は後半のみ収録する。天台集が収録していない前半に「王子晋」が登場する他、天台山に関わりが深い語句は見あたらない。天台集がなぜこの詩を収録したのかは疑問が残る。

（以下、続稿）

［注］

（1）天台山を記述の対象とした山岳地志に、唐代の徐霊府撰の「天台山記」というものがある。現存する天台山地志として最古のものとして注目される。この資料については、下記の拙稿で検討を加えた。

・「唐徐霊府撰「天台山記」初探」『中国研究集刊』（大阪大学中国学会）、歳号（第二九号）、二〇〇一年

・「国立国会図書館蔵「天台山記」について」『汲古』（古典研究会）、第四一号、二〇〇二年

・「「天台山記」の流伝」『日本中国学会報』、第五五集、二〇〇三年

・「「天台山記」本文研究（前編）」『平成一四年度～一六年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書　国立国会図書館蔵「天台山記」の総合的研究』、二〇〇五年

・「「天台山記」本文研究（後編）」『平成一七年度～一九年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書　日本と中国の地理書の比較思想史的研究』、二〇〇八年

（2）これ以外に、南宋王象之「輿地紀勝」巻十二にも台州関係の詩を六十篇弱掲載しているが、詩の全文ではなく断片の引用であることから今回は検討の主たる対象から外した。また元代のものと思われる「天台山志」（「道蔵」洞玄部記伝類）にも、柳泌や李白の詩が収録されて

いるが数編に過ぎないので、これも主たる対象から外した。

（二〇〇八年九月三〇日提出）
（二〇〇八年十月十七日受理）